

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	布井 雅人
論文題目	好み判断に及ぼす文脈・処理要因の影響に関する認知心理学的研究		
(論文内容の要旨)			
<p>人間の意思決定や選択の過程において、関連する対象に対する「好み」は判断に影響する重要な要因であり、これまでに多くの心理学研究が行われてきた。本論文では、対象に対する好みを左右する要因として、処理要因と文脈要因の2つを取り上げ、それらが好み判断におよぼす影響について検討した。処理要因とは、対象を見る、聞く、手に取るといった経験を含み、文脈要因とは対象の周囲に存在するさまざまな情報を含むものである。本論文では、(1) 処理の質が好み判断に及ぼす影響、(2) 対象と対提示される他者や、他者の意見が好み判断に及ぼす影響、(3) 対象の希少性を示す付加的な情報の影響の3つの側面から、実証研究を行っている。認知心理学における従来の好み判断の研究では、比較的低次の処理 (単純接触など) の影響をみるものが主流であるが、本論文では高次認知処理の影響に焦点をあてている。</p> <p>第1章では、まず、好み判断に関する先行研究をレビューするとともに、本論文における問題の立て方と論文構成を示した。好みを規定する要因の研究では、対象自体の有する特徴に焦点を当てる研究と、それ以外で好みを左右する要因に焦点を当てる研究がある。従来、前者の研究が圧倒的に多く、後者の研究は比較的少数であるが、好み判断に大きな個人差がみられることを説明するためには、後者の研究が不可欠であると言える。次に、好み研究で用いられる方法について整理した。</p> <p>第2章では対象に対する処理の質の違いが好み判断に及ぼす影響について検討した。実験1では対象 (無意味図形) に対する1度の処理と複数回の処理、および浅い処理と深い処理という2つの要因が好み判断にどのように影響するかを検討した。その結果、処理の質が好み判断に影響すること、また深い処理を複数回行うことによって生じる好みの上昇が、記憶を媒介にしていることが示された。</p> <p>第3、第4、第5章では、文脈要因のひとつである、周囲に存在する人物の情報が好み判断に及ぼす影響を検討している。第3章では、周囲の人物の視線方向、表情、魅力度といった顔に含まれる情報が、対 (つい) 提示される対象 (無意味図形) の好み判断に及ぼす影響について検討した。その結果、対象に注意を向ける他者の視線、魅力度、表情 (快、不快) のいずれもが対象の好み判断に影響すること、その影響は、「対象に対する他者の評価」「魅力や表情が示す感情価」の効果と考えられることが示された。第4章では、対象の周囲に存在する人物の表情と人数が、対象の好み判断におよぼす影響について検討した。対象としたのは無意味図形 (実験4、5、6) と顔画像 (実験7) であった。無意味図形に対する好み判断では、周囲の人物の絶対数と相対数を操作して実験を行った。絶対数を操作した実験4では、周囲の人物の表情が喜びのときに好みが上昇し、嫌悪のときは低下した。数の影響はみられなかった。一方、周囲の人物の相対数を操作した実験5では、表情が喜びのときは上昇し、嫌悪のときは低下した。相対数の操作で人数の影響があったのは喜び表情のみであり、人数が多いほど好み判断はより上昇する結果となったが、嫌悪では人数の効果はみられなかった。実験7では、顔画像を好み判断の対象として使用した。実験パラダイムは実験4、5、6、と同様である。その結果、周囲の人物の表情が喜びではなく嫌悪表情に変化したときに好意度の上昇がみられるなど、無意味図形を対象とした実験結果と</p>			

は異なる結果となった。

第5章では文字情報で提示された他者の評価が好み判断におよぼす影響について、無意味図形と顔画像を用いて検討した。その結果、好み判断の対象とともに提示される他の人たちの好意度に関する情報（平均の好意度として表示される）が、好み判断を左右すること、評価対象によらず他者の評価への同調が生じ、自身の好意度判断とのずれの大きさによって同調の程度が調整されていることが明らかになった。

第6章では、希少性に関する文字情報が商品評価や選択に及ぼす影響について検討した。好み判断の対象は食品や日常物品などの商品画像で、期間限定、数量限定、地域限定であることを示すラベルとともに提示され、限定とは関連しないラベルとともに提示する条件と比較した。その結果、限定ラベルとともに提示された場合のほうが商品魅力度が高く評価され、さらに、より買いたいと思う商品を2択で選択する課題でも、入手可能性の制約を表す限定ラベルが提示されることで商品魅力度が向上することが示された。

第7章では、第2章から第6章で記載された11の実験結果をまとめるとともに本論文の意義について論じられた。本論文での一連の検討によって、好み判断にみられる多様性は、対象に対する処理の質や、周囲にいる他者が示す対象への関心（視線向き）や好悪（表情）に関する情報、そうした情報を提供する他者の数、対象の入手難易性に関わる情報など、さまざまな要因によって説明されることが実証された。対象に対する日常経験のありようやその蓄積によって、好み判断の多様性が生まれると結論づけられた。

(論文審査の結果の要旨)

人やものに対する好き・好きでないといった「好み判断」は、その対象に対する人の意思決定や態度、行動を左右する重要な心理過程である。その対象が自身にとって有益かそうでないかを評価し、個人の行動に一貫性をもたらすという点で、好み判断は人と対象との心理的距離を調整する、重要な役割を果たしている。

ある対象に対する好み判断は、判断する本人にとっては自明なことであり、それほど悩まずに決定を下すことができるが、なぜその対象が好きなのか(好きでないのか)、なぜその程度に好きなのか(好きでないのか)の理由を知ることはそれほど容易ではない。人の好み判断に関しては、すでに長い研究の蓄積があるが、それらの心理学研究の多くは、「どのような対象が一般的に好まれやすいのか」を明らかにする目的のものであり、対象の属性に焦点を当て、多くの人々が好む対象が共通に有する特性を明らかにしようとしてきた。しかし、一方、好み判断には大きな個人差があり、同じ対象が人によって好まれたり好まれなかったりすることは、日常においても頻繁に経験されることである。さらに、同じ人であっても、そのときの状況や状態によって、同じ対象に対する好みの判断が変動することも知られている。こうした好み判断の個人差や状況による変動の機序を明らかにするには、対象の好み判断に対する外的な要因の影響を検討する必要がある。著者はこうした側面に着目し、好みを左右する処理要因と文脈要因の影響について、無意味図形、顔画像、日常物品を刺激として11の実験を重ねて検討した。

著者が実験の中で取り上げたのは、1) 対象を知覚したときの処理の性質(浅い処理と深い処理の比較)、2) 対象の周囲に配置された人物の様子(視線向きや表情)や対象に対する他者の評価、3) 対象の希少性に関する言語情報、である。

好み判断に関する最近の心理学研究の動向が、主として対象に対する潜在的・受動的な処理の影響を解明するという方向で進行する中で、知覚者の意図的な処理や社会的文脈という高次認知過程の影響に着目し、しっかりと統制された実験課題を工夫して検討を重ねた点は、著者の視点のオリジナリティを示すものと高く評価できる。

本論文の実験で明らかになった新しい知見としてとくに注目されるのは、以下の点である。

(1) 深い処理が対象の好みを高める効果をもち、それは6週間という長期にわたって持続すること、また深い処理を複数回行うことによる好みの上昇が、再認記憶によって媒介されており、記憶が好み判断に影響することを実証したこと。好み判断における記憶の媒介を明らかにした第2章の研究は、国際誌 *Journal of Cognitive Psychology* に掲載された。

(2) 対象に対する好み判断は、周囲に存在する人物の視線向きや表情による影響を受けることに加えて、人物の「数」も好み判断を左右する要因となること。さらに、人物の表情がポジティブ(喜び)であるかネガティブであるか(嫌悪)によって、人数の効果が異なり、ポジティブな表情の人物の割合が多くなるほど好みの評価は上昇するのに対して、ネガティブな表情の人物は、1名でも存在すると好みの評価が低下することが明らかになった。こうした、快・不快表情の影響力の質的な差異は、著者による新規な発見であり、今後さらに詳細な検討が望まれる興味深い報告である。この知見をまとめた第4章の研究は、日本心理学会の専門誌「心理学研究」に掲載された。

さらに著者は、顔画像に対する好み判断におよぼす社会的要因の影響が、無意味図形の好み判断とは質的に異なることを示した実験や、日常物品の画像に付加された限定ラベル(地域限定、期間限定)のような、対象の入手可能性に関する制約条件とい

う、一見好みを左右する要因とは考えにくい情報が好み判断に影響をもつことを実証した研究などを報告し、人の好み判断が実に多様な要因の影響によって成立する複雑で高次の認知プロセスを反映していることを多角的に実証している。

論文審査にあたっては、好み判断を統合的に理解する理論的枠組みの提示にややもの足りなさが感じられること、研究で用いた好み判断の対象が、実験的な統制を重視して、中性的な属性をもつものに限られており、好み判断の多様性を捉えるにはさらなる検討が必要であることなどいくつかの課題が指摘された。しかしこれらは、本論文で示された、好み判断に関する複数の新しい知見の本質的な価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年2月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降